この部屋から、旅に出よう。 Vol.8

Platform

残暑から秋への移ろい

季節が終わり、また始まる。

station

- NeosVR：Fall'n Jams
- VRChat：Remake bamboo grove
- cluster：鈴虫の鳴く夜に
- Real.W：哲学堂公園

Platform編集部

Platform Vol.8 contents

Gravure: Colored Autumn Waterfall 4

Creator Jam130
Megajam #13: Fall'n Jams NeosVR 12

Remake bamboo grove VRChat 18

鈴虫の鳴く夜に cluster 24

哲学堂公園 Real.W 30

あとがき 36

第８号のテーマは「秋」。

昨今、秋が急速に消滅しつつあります。昨日までは暑かったのに、今日はもうさむい。ゆるやかに季節が移ろうことなく急激に流れていきます。

そんな消えゆく秋がＶＲ空間に残されていました。もはや記憶やイメージの中にのみ残る秋、色づく紅葉や澄んだ空に浮かぶ十五の月、芯に冬がある乾いた風、そしてほんの少しだけメランコリックな気持ち。ＶＲ世界で秋を取り戻してください。

編集長

To the next PLATFORM.

世界には、色んな町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

——それが「Platform」

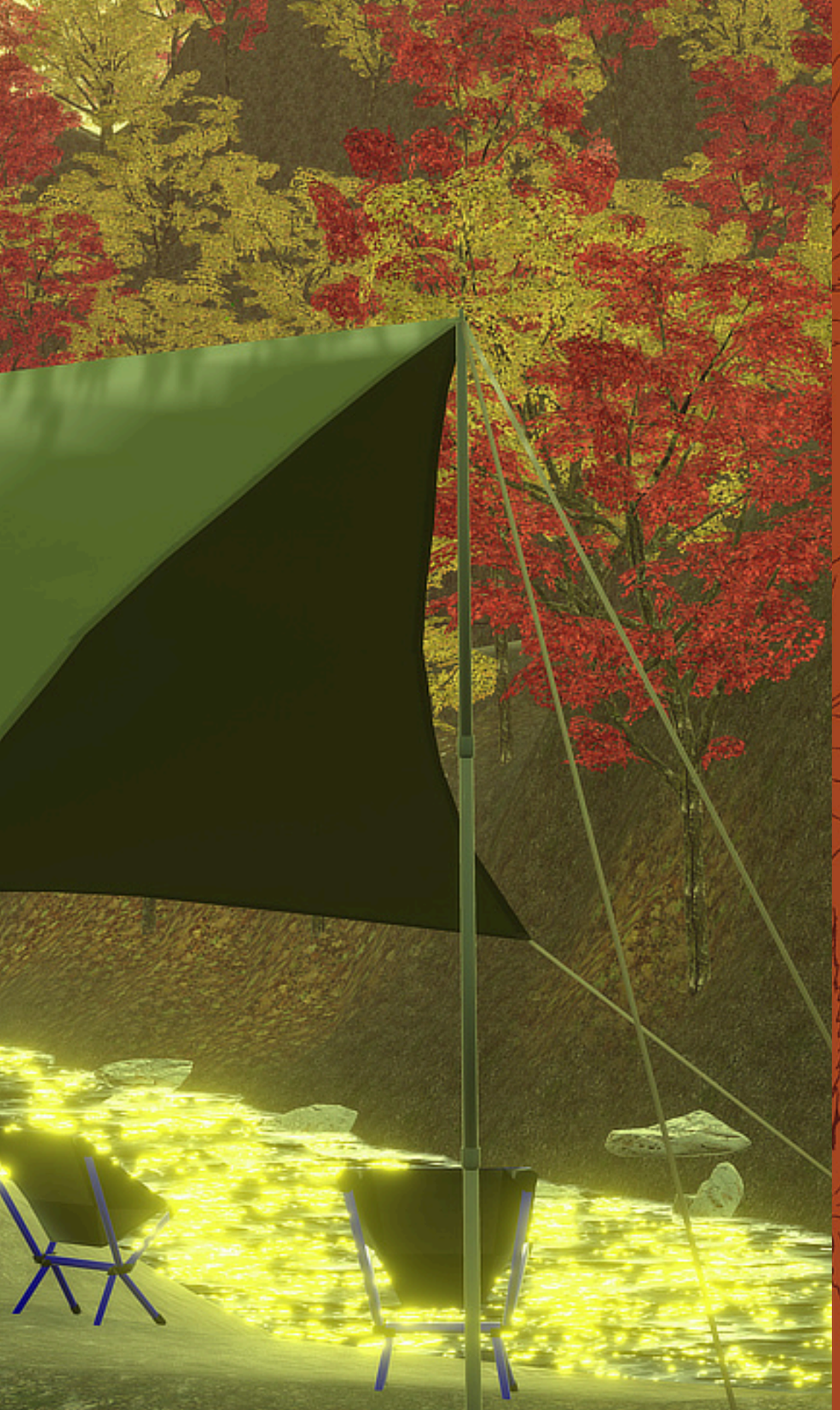
写真／Tokikaze

秋魅想滝

秋風に吹かれ
吊り橋を渡り
滝の響きを感じる

A Time in Autumn

秋の風、キャンプのひととき。



秋めく渓谷

Colored Autumn Waterfall

Created by yu_Hisame

写真／オージェ

クリエイティブグループ「Creator Jam」による
「秋」をテーマに制作したワールド。

創作の秋

蒸し暑い日々にうんざりしながら過ごした末、突如冷たい風に吹かれると、途端に寂しくなる。失われた外出する気力を取り戻すと共に、脳裏に浮かぶのは秋の文字。そこから連想する言葉は、各々の生まれ育った環境によって多岐に渡るだろうが、私の場合は芸術の秋と旅行の秋が真っ先に思い付く。

何故寂しくなるのだろうか？　思えば、中高生時代における三年生の秋は、部活を引退し、体育祭などの大きな行事も終わった結果、子供ながらに居場所や人との繋がりを喪失したと無意識に感じていた。より深く感傷に浸ってみると、大学四年生の秋は、暇を持て余しながら、人の温もりに飢えていた時分であった。当時、私は幸運にも就活で内定を勝ち取り、大学に行く用事もほとんど無くなったが、就活や公務員・教員試験などで忙しい同級生たちと共に遊ぶことは難しく、空虚さを埋め合わせるのに必死であった。

他方、その大学四年生の秋は、殊更に創作活動に打ち込んでいた時期でもあった。文字通り芸術の秋である。小説家として一人前に稼いで、好きなように生きていく、そんな夢を叶えたいという実利的な目論見もあったが、それ以上に寂しさを紛らわせたかった面も大きい。とは言え、何ら変化がない、滅多に客が訪れないアパートに閉じ篭るばかりでは、無機質な現実に押し潰されそうで耐えられなかった。時間だけは十二分にあったから、私は自転車を漕いで丘や川辺の散歩道に赴き、音楽を聴きながらオリジナル小説の構想を練る日々を過ごしていた。「芸術の秋」とともに「旅行の秋」が思い出されるのは、こうした経緯がある。

見上げている、誰かの制作風景を

Creator Jam 130
MegaJam #13 : Fall'n Jams

創作の塊、一つの世界。

あれから少なくない年月が経過したが、秋の風を浴びる度に思い出す。人恋しさと同時に、人気のない場所で過ごす瞑想にも似た時間への憧れを。

上記のような理由で、私は今回のワールドに惹かれたのかも知れない。Neos VRの秋のワールドの数々を旅した結果、このCreator Jam 130 - Megajam #13 : Fall'n Jamsが琴線に触れた。調べて見ると、Creator JamやNeos VRで活動している海外のクリエイティブグループだという。毎週イベントを開催しており、そこではリアルタイムでワールドを制作する。この秋のワールドも、その毎週のイベントで制作されたワールドという訳だ。

ワールドに入場すると、巨大な掲示板らしきモノに、数々の画像が掲示されている。と思いきや、いざ横に回り込んでみると、掲示板ではなく巨大な食パンだったようだ。良くも悪くもやりたい放題な様相を前にし、私は制作途上の参加者たちの姿を幻視した。きっと参加者たちは、型に囚われず自由に創作を楽しんでいたのだろう。無論、私はワールド制作者ではないが文章制作という別分野のクリエイターであり、思うが儘に空想を巡らせる楽しさは分野が違えどそれとなく分かる。

実際、掲示板（食パン）に掲載された法則性のない画像から、顔も知らない参加者たちの創作熱に想いを馳せるのは愉快であった。何らかの料理の画像を見ては、「多分参加者の一人が、これをこのワールドで食べてみたいと言い出したのだろう」と一人頷いたり、不自然に宙に浮いていた動画プレーヤーを見上げては、「多分誰かとアイディアを共有するのに使って、片づけるのを忘れてしまったのだろう」と、自分自身心当たりある光景に苦笑いする。

この世界（ワールド）に出会うと創作を刺激する

ワールドに踏み入れるとありとあらゆる情報がたくさん入り創作意欲を刺激させてくれる。どのプラットフォームもどのワールドにも通づるだろう。

私はPlatformの文章をはじめ、メタバースの仕事として小説を書くときは、実際にワールドに入り、見回しながら情景描写をすることが多い。しかし、自分でも面倒臭い性質だと思うが、あまりに奇麗すぎるワールドだと、見惚れて小説を書くことを忘れてしまったり、逆に美観に圧倒されまいと変に斜に構えることに注力するなど、帰って捗らない場合も多々ある。そういう意味では、このワールドは私の執筆にはとても向いている。

絶えず降り注ぐ紅葉、沈むことのない夕焼け。目を細め、それらを仰ぎながら、丸太の椅子に座り、焚火に手を近づけるのは、無から文章を生み出す空想の旅に出る、上質な準備時間。それでいて、ふと視界の隅に映る無秩序なデータの数々が、私の創作意欲を刺激する。楽しそうに制作しただろうワールドクリエイターたちの思い出。これらが否が応でも連想され、私自身創作を楽しみたくなる。

子ども時代、職人や芸術家の机が散らかっているのを見て、特に根拠なくカッコいいと考えていた。今思えば、クリエイティブな行為には、意欲をそそられるような美観と同じように、雑多な情報も必要なのかも知れない。それを前にして自ずと何かを新たに作り出したくなるようなカオスが、あるいは自分がクリエイターであるという現実に引き止めさせてくれる、ある意味で最も身近かつ重要なスパイスが。

（文：sun）

あっ、
良いアイデア
見つけた。

Creator Jam 130
Mega Jam #13
: Fall'n Jams

ACCESS in NeosVR

月見の季節 盃の中の世界

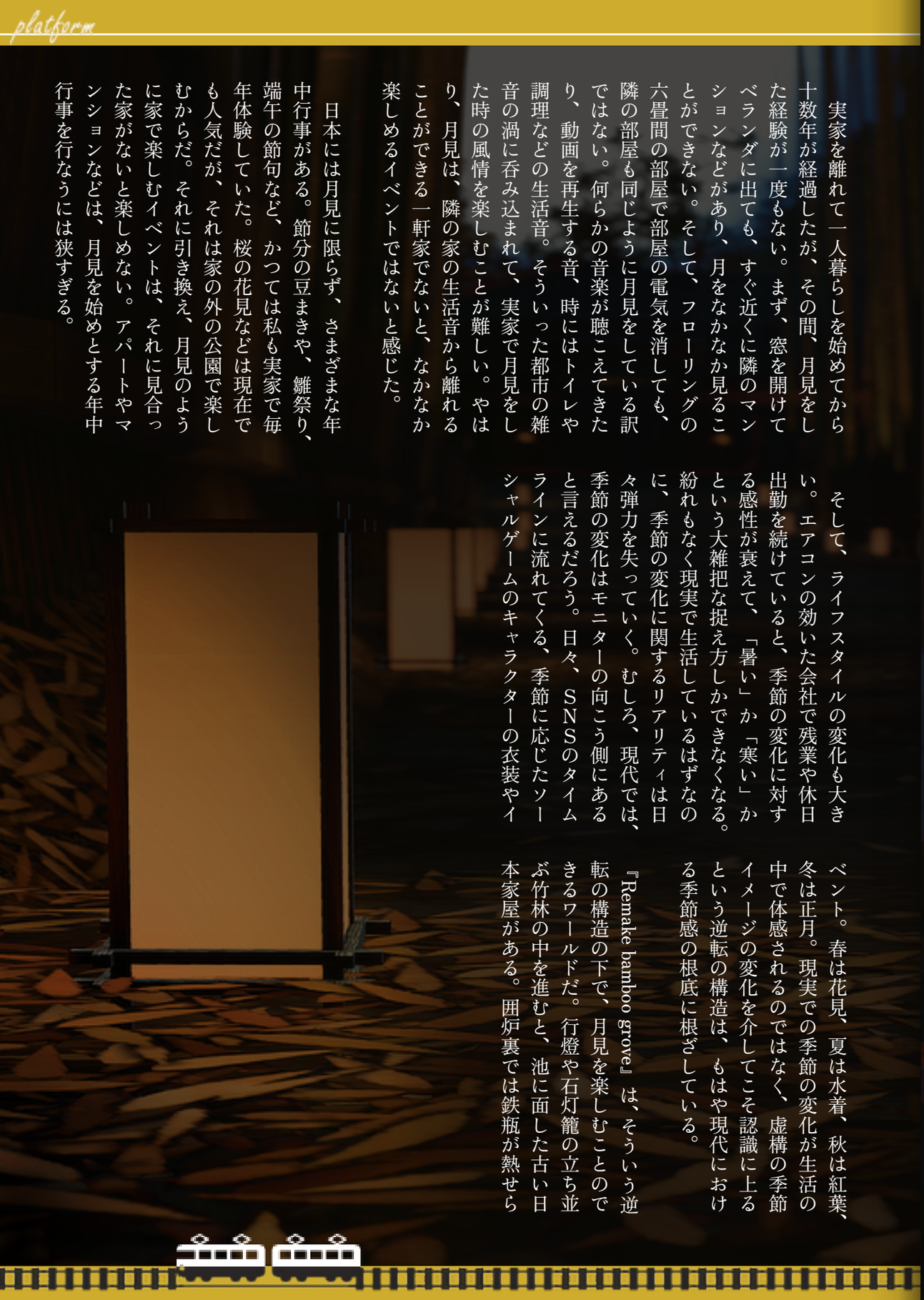
私がまだ実家で生活していた頃、仏間が縁側を通して庭と繋がっていて、毎年秋を迎える頃に月見をしていた。白い紙を敷いた素木の三方に、茹でてから冷水にさらした月見団子を並べて、部屋の電気を消す。傍には芒（すすき）が飾られている。縁側の戸を全て開けて空を眺めると、月が見える。運が良いと庭に住む秋虫の鳴き声が聴こえてきて、そのまま三十分程度ぼーっとしていたものだった。

実家を離れて一人暮らしを始めてから十数年が経過したが、その間、月見をした経験が一度もない。まず、窓を開けてベランダに出ても、すぐ近くに隣のマンションなどがあり、月をなかなか見ることができない。そして、フローリングの六畳間の部屋で部屋の電気を消しても、隣の部屋も同じように月見をしている訳ではない。何らかの音楽が聴こえてきたり、動画を再生する音、時にはトイレや調理などの生活音。そういった都市の雑音の渦に呑み込まれて、実家で月見をした時の風情を楽しむことが難しい。やはり、月見は、隣の家の生活音から離れることができる一軒家でないと、なかなか楽しめるイベントではないと感じた。

日本には月見に限らず、さまざまな年中行事がある。節分の豆まきや、雛祭り、端午の節句など、かつては私も実家で毎年体験していた。桜の花見などは現在でも人気だが、それは家の外の公園で楽しむからだ。それに引き換え、月見のように家で楽しむイベントは、それに見合った家がないと楽しめない。アパートやマンションなどは、月見を始めとする年中行事を行なうには狭すぎる。

そして、ライフスタイルの変化も大きい。エアコンの効いた会社で残業や休日出勤を続けていると、季節の変化に対する感性が衰えて、「暑い」か「寒い」かという大雑把な捉え方しかできなくなる。紛れもなく現実で生活しているはずなのに、季節の変化に関するリアリティは日々弾力を失っていく。むしろ、現代では、季節の変化はモニターの向こう側にあると言えるだろう。日々、SNSのタイムラインに流れてくる、季節に応じたソーシャルゲームのキャラクターの衣装やイベント。春は花見、夏は水着、秋は紅葉、冬は正月。現実での季節の変化が生活の中で体感されるのではなく、虚構の季節イメージの変化を介してこそ認識に上るという逆転の構造は、もはや現代における季節感の根底に根ざしている。

『Remake bamboo grove』は、そういう逆転の構造の下で、月見を楽しむことのできるワールドだ。行燈や石灯籠の立ち並ぶ竹林の中を進むと、池に面した古い日本家屋がある。囲炉裏では鉄瓶が熱せら



写真／Tokikaze

れ続けてれている他には、台所や寝室、風呂などの生活に必要な空間が全く備えられていないことから、どうやらここは生活とは別の目的のために建てられたのだと分かる。そして、池の向こう岸を眺めると、色鮮やかな秋の紅葉の奥に巨大な満月が配置されている。現実と同じ大きさの満月ではない。もしも、月の位置に土星があったとしたら、地球からはこう見えるのではないか。それくらい大きな満月である。

しかし、この満月も全体像を見ることはできない。紅葉によって部分的に隠された月が、本当はどのような姿をしているのかは、誰にも分からない。その余韻が想像力を掻き立てる。フレンドと二人で月を眺めながら盃で酒を飲み、「向こう側の月はどうなっているんだろう」と会話を楽しむような、そんな月見のために作られたワールドである。

日本における月見は、平安時代の初めに嵯峨天皇が離宮・大覚寺に人工池である大沢池を作り上げ、水面に映った月を楽しんだことで有名になった。平安貴族にとっての月見は、月を直接見ることではなく、池や盃に映し出された月を愛でる行為だった。当時の月見は詩歌や管弦を楽しみつつ、酒を酌み交わす、雅な遊びだったのだろう。

ここで面白いのは、「月見のために人工物を作り上げる」という点で、平安時代の大沢池も、仮想現実の『Remake bamboo grove』も似ていることである。平安時代の月見における月は、池や盃の酒に映し出されるものであり、現実の月ではなかった。では、私たちがこのワールドで眺めているこの月は何なのだろうか？

それは現実における月ではない。しかし、仮想現実という一杯の盃に映し出された月なのである。私たちは現実を別の層の下で写し取るべく、仮想現実に何かを映し出さずにいられない。とうに過ぎ去った過去であれ、行きたかった現実の風景であれ、理想の自分の姿であれ。仮想現実は、盃としてそれらを映し出す。それゆえ現在における仮想空間の月見は、月見の歴史に照らし、その正統な後継者と言える。

平安貴族は仮想現実を手中の盃に映し出していたが、現代の私たちは、現実・虚構の逆転構造の下、むしろ盃の中で月見を楽しんでいる。『維摩経』の「芥子粒の中に須弥山が収まる」という仏教的な世界観のように。

現実のアパートやマンションで日々生活をしていても、月見を楽しむことはなかなかできず、季節の移り変わりもよく分からない。今宵は、仮想現実の中で季節の変化を楽しむのはいかがだろうか。VR・HMDを外すと月見の一晩の夢は覚めてしまうのかもしれない。けれどもそこで得られた季節の変化を楽しむ感覚くらいは、月見のお土産として持ち帰ることができるだろう。

（文：わく）

Remake bamboo grove
（作：pandamanzz）

ACCESS in VRChat

To the next PLATFORM.

鈴虫の鳴く夜に

秋の夜長に鈴虫の音色と落ち着いた楽曲を聞きながら夜の散歩を楽しむ。実在する場所をモデルにし、現実とひと味違う広大なワールドを回ってみませんか？

cluster

写真／オージュ

体温の去った季節

やり残したことが山ほどある。この季節になると毎年そう思うし、私はこれからもずっとその思いを抱えて一生を終えていくのだろう。

ネットニュースでは環境変化の影響で日本の春と秋という季節は無くなっていくのだ、などと連日喧伝しているが、いやまさにそうなのだろうな、と思うような残暑が現実世界では続いている。けれども不思議と、一抹の違和感というか、学園祭を終えた校舎に佇んでいるようなうら寂しい想いだけが日々積もっていく。クーラーを切るにも、長袖を着るにも早いと感じる長月の候、夕涼みというには幾分季節外れの感は否めないが、ともかくこの行き場のない想いを少しでも冷ましそうと私は「鈴虫の鳴く夜に」というワールドを訪れた。

リスポーン地点には赤色（せきしょく）の手摺りを背負った階段と、その先の暗い海と、明滅する星々が広がっている。小脇の青々と茂る草木がワールドに色を添えているが、奏でられるピアノの音色の隙間から鈴虫のお喋りが聞こえてくることから、日中に吸い込んだじんわりとした地表の熱は忍び寄る秋の風に少しばかり削り取られている時節なのだろう。とりあえず、とまずは左手にある小さな広場を覗いてみることにした。無骨な木々に囲われたその広場には街灯が一基ポツンと立っている。少し近づいてみると、彼は遥拝所の先に沈んでいく星々を愛おしそうに眺めているようだった。観光地然とした佇まいにやや高揚感を覚える一方で、その街灯の許が、何となく、居心地が悪く想えて、私は後退り、鈴虫が合唱する森の方へと踵を返した。

現実で見覚えのある場所

このワールドを歩いて行くとどこか見覚えのあるスポット。現実世界で訪れて見たくなるような場の風景を楽しめる。

そういえばこのワールドの概要欄には作者が参考にした現実世界の場所が記されていた。鎌倉高校前の踏切、下灘駅、須賀神社の階段、中山千枚田、高屋神社と、どれもいつか訪れてみたいと考えていた場所だったし、どこもあの灼熱の季節を幻視してしまう場所だと個人的には考えている。リスポーン地点の階段は須賀神社の階段であろうし、今、森を抜けて辿り着いた眼下に広がる棚田の風景もきっと中山千枚田のそれに違いない。大した長さもなかった連休の中で今年も果たせなかった名所旧跡への幻の旅程に、仮想世界で早くも二つレ点を振ることができたようだ。風光明媚な棚田を前に深呼吸を入れていると視界の脇に光を帯びた丹塗りの鳥居が小高い丘からすく、と立っているのが見えた。あれは高屋神社だろうか。既に引き続く残暑と忙しさに参っているんだ、もうひと参りする程度どうってことはないさ、と連続する仮想の鹿島立ちに俄然高揚する私の足元で鈴虫たちがひそひそ話をしている。視線を落とした先の揺れる雑草たちからは草いきれを感じない。仮想世界の気温が現実世界のクーラーの冷気で書き換えられてしまっているのだろうか。彼らの声に得も言えない寂寥感を覚えていく私がいた。

棚田。鈴虫が鳴いているだけでなく、ほたるの光も見える。

猛暑が落ち着き、気温や気圧が変動するとどうしても体調というものは崩れやすくなってしまう。油断した私も先日風邪を拗らせてしまったが、そうした自然の影響を多分に受けて我々は何となくこの季節にセンチメンタルな感情を抱いてしまうのだろう、と忙しさのあまり近頃はそのような無粋なことを思考するようになってきた。先ほど覚えた寂寥感もきっとこれなのだろうと考えつつ棚田から引き返した私は、赤色の手摺りを横目に階段を滑り、辿り着いたこじんまりとした公園から神社に続く急勾配の参道を見上げていた。流転する星々を丹塗りの鳥居が見つめている。現実世界においては翌日の筋肉痛を恐れて上ることを躊躇するであろう鳥居へ続くこの参道も、仮想世界では一瞬で上り切ることができるのでありがたい。一気に走り抜け、また一つ旅程にレ点が振られる。

公園から神社に続く急勾配の山道に上がると、赤色に目立つ鳥居が下を向けて見つめているように見える。

上から見渡せば風光明媚な夜景

丹塗りの鳥居から見渡すと美しい情景が広く見える。この夜景は感情を揺さぶるように感じさせた。

鳥居の先にはざんばらに枝打ちされた御神木が腕を広げていた。どれどれ、と御神木の小脇から風景を見下ろしてみると、丹塗りの鳥居とは対照的な静かな海と、道と、線路と、森と、星々が一望できた。風光明媚な景色はしかし、秋を孕んでいるように感じる。また、あの寂寥感が湧いてくる。足許の緑が風で揺れる。草いきれは感じない。抜き足差し足で訪れた秋風にあの季節が掻き消されていく。そうか、この仮想の世界にも、現実の世界にも、もうあの季節の体温は残っていないのだ。私たちは未だ落ち込まない気温の中にあの灼熱の季節の体温を無意識に探して、感じようとして、そして見つけられずに寂寥感を覚えるのだろう。広場の街灯も、鈴虫たちも、御神木も、この景色も、それに気が付いているのだ。それが受け入れられない私は、参道を急いで下りていく。

カンカンと声を上げる踏切がゴールテープを下ろす。雄叫びを上げる電車が次の季節へと走り去っていく。彼の来し方を見ると四台のジープが停車していた。ペーパードライバーの私がハンドルを握る。頬を撫でる風があの季節のいきれを消し去っていく。乗っていた白いジープはすぐにガードレールに刺さってオシャカになった。黒いジープで再び来し方を目指すも、私は終ぞあの季節には辿り着けなかった。体温はもう、感じない。

（文：ヤマノケ）

アニメの聖地の鎌倉高校前の踏切を彷彿させる場所。右から左へ走っていく列車は風のように去っていく。

道路には４台のジープの車が止まっている。この車は運転することができる。夜空のドライブにも良い。

鈴虫の鳴く夜に

Created by ぷりくと

鈴虫の音色を聞きながら静かな夜で散歩するのも良さげなワールド。

ACCESS in cluster

NOW PLAYING...

あの夏が残る

写真／ニッツ編集長

大分昔のSDカードケースを発見した。

なんだっけこれ。中身を全く覚えていなかったので、順番にパソコンに挿していった。そうすると、あるフォルダ名が目に留まる。「選抜　音楽」と表示されている。あ、そうだ。これは昔作ったお気に入りの楽曲のプレイリストだ。これは確か、夏合宿の時に、移動中の車で流すためにつくったやつだ。だから、中をみると夏っぽくて懐かしい曲が並ぶ。そうだ、今日はPlatformに載せるエッセイ要するにこの原稿を考えるべく取材をしようと思っていたし、その時のお供にこれを聞くことにしよう。そう思って格安の音楽プレイヤーに古いSDを入れて、出掛けることにした。

Real World

やってきたのは哲学堂。中野にある公園だ。東洋大学の創設者である井上円了によって創られた公園で、宗教や哲学を視覚的に表現した公園とのことだ。実を言うと、前からここには来てみたかったのだが、中央線の中野駅からは微妙に遠く、より近い西武新宿線を使うと、最寄りになっている沼袋と新井薬師前という駅の両方の中間というなんとも微妙な位置にある。エッセイの取材ということにかこつけて、この度はじめて、残暑厳しい中やってきたというわけだ。

よし、とりあえず音楽を聴きながらぐるっと一周してみよう。SDカードを入れたプレイヤーを起動し、ランダム再生する。一曲目は…「夏の手紙」。ナイス橋本という、残念ながらあまり売れなか

ナイス橋本がSDカードのなかで歌い終わり、次の曲になる。ジッタリンジンの「夏祭り」だ。今やカバーバージョンのホワイトベリーの方が有名だが、懐メロ好きでもある私からすると、断然ジッタリンジンの方がいい。「やっぱりね、パワーが違うよパワーが」なんて思いながらあるく。そういえば、「夏祭り」は夏の代表曲みたいに扱われてるけど、そもそも地元に夏祭りがあった人ってのはどれぐらいいたんだろうか。少なくとも、私の地域にはなかったな。

少し歩いていくと、「常識門」という門があった。常識…どうしよう、なくてもくぐれるだろうか。

無事通ることができた。よかった。

常識門を通り抜けてしまうと、正直普通の公園とあまり変わらない感じになった。確かに庵があったり、建物がいくつかあったりはする。そこには色々な哲学者や宗教家が祀られてもいたし、紹介文には「三祖苑　三祖碑には、中国の黄帝、印度の足目、ギリシャのターレスの三人が刻まれている」と記載されている石碑などもあった。とはいえが、それくらいだ。「これ、ほとんど普通の公園散歩だよな」と思いつつ、昔好きだった音楽だけで構成されたプレイリストを聞き流していく。

常識門

三祖碑

NOW PLAYING...
夏祭り

六賢臺

哲理門

四聖堂

NOW PLAYING...
夏の手紙

ったアーティストの曲。２０００年代初頭にちょっと流行ったらしいが、今は音楽をやっていないらしい。結構いい曲書いてたんだけどな。

昔の自分に手紙を書くという内容の曲を聞きながら、哲学堂公園の入り口近くにある門をくぐる。この門は「哲理門」というらしい。その奥には「四聖堂」といって孔子・釈迦・ソクラテス・カントをまつるお堂がある。なんか…いや、確かに全員偉大な哲学者だろうけど、四人全員をひとまとめにするのはなんか違うような気がする。さらにその右手には赤い塔がある。これは「六賢臺」といって聖徳太子・菅原道真・荘子・朱子・龍樹・迦毘羅を祀っているとのことだ。こちらは東洋哲学ということでまとめられているようだ。この塔とこの六人の関係は、哲学無きこの身ではよくわからない。古くからあるお寺のように荘厳というわけでもなく、塔とはいってもものすごく大きいわけではないので、いまいち「すごい！」という気持ちにはならない。なんだかわからない、という感じのまま、一応見学する。

アジアンカンフージェネレーション、スキマスイッチあたりの曲が流れていたが、今となってはあまりピンとこない。当時は気に入っていたんだろうが、今となってはそこまでもないのか。自分の感性が変わったのか、あるいは衰えたのか。そもそも発表年もアーティストもバラバラで、コンピレーションアルバムというにはテーマ性がない。本当に過去の自分の「好き」だけで集められた音楽たちがそこにあった。「自分の哲学観をあらわしたってわけで、哲学堂で祀られている人たちの方が一貫性があるな」などと思う。

公園のそばを流れる妙正寺川の側を歩く。もうプレイリストも終わりだし、暑くて疲れたからそろそろ帰ることにした。まったく、これ書いてるの9月も末だよ。いつまで残暑やってるんだ。そろそろ秋に移らせてくれよ。そう思いながら、それでも自販機でカルピスウォーターなんて買ってしまい、今年の夏やり残したことを消化してしまった。

プレイリスト最後の一曲はELLEGARDENの「The Autumn Song」。SDカードの中に残っていたあの夏ももう終わる。こちらの季節はいつ、変わるのか。

（文：ニッソ編集長）

哲学堂公園

ACCESS
東京都中野区松が丘1-34-28

・西武新宿線「新井薬師前駅」から徒歩12分
・都営大江戸線「落合南長崎駅」から徒歩13分

開園時間：9:00〜17:00
（季節により変わりますのでご注意ください）

駐車場：12台（平日のみ）

ACCESS to HP

To the next SEASON.

station

Gravure：Colored Autumn Waterfall

撮影：Tokikaze

neos

Creator Jam 130 - Megajam #13

執筆：sun
撮影：オージュ

VR CHAT

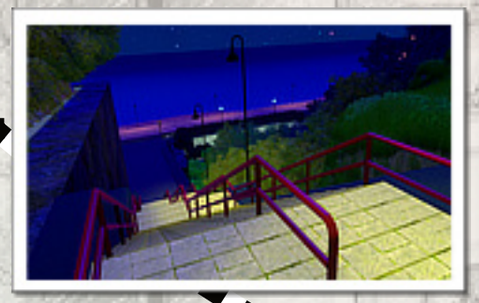
Remake bamboo grove

執筆：わく
撮影：Tokikaze

cluster

鈴虫の鳴く夜に

執筆：ヤマノケ
撮影：オージュ



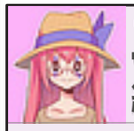
Real World

哲学堂公園

執筆&撮影：ニッソちゃん

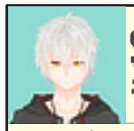
感想などは
#Platform通信欄
へぜひお寄せください！

Platform Vol.8 あとがき



ニッソちゃん
編集長

5時になって暗くなっていると秋が来たことを実感します。熱が失われ、闇が長い時間を支配しはじめます。次号ではそうしてやってきた「夜」を歩きましょう。お手持ちの切符をなくさないように。



sun
ライター

おかげさまで最近は仕事が増えてきて、色々と余裕が出てきました。なんだか旅行をしたい欲が湧いてきたので、久しぶりに現実世界のあちこちを歩き回ってみようかな。

わく
ライター

現実の秋はいつの間にか終わっているけれど、原稿を書くことを意識すると普段よりも秋の楽しみが増えて良かったです。

オージュ
カメラマン

毎朝出勤するとき、沿道に並ぶ木々の色づきをみると季節の進みを実感します。ふと耳を澄ますと虫の鳴き声や鳥のさえずりも変わっていて、季節は五感全てに訴えてくるものなんだなと。

Nag
校正

軒下のビオトープに手を入れていると、水温やら生き物の動き方やらに秋の訪れを感じます。冬越えの準備もぼちぼち開始です。

思惟かね
編集/デザイン

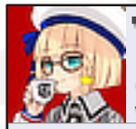
今号は中々難産でしたが、皆さんの写真・文章のお陰で美しく仕上がったと思います。ところでもう11月なのにまだ暑いのはいったい…。

燕谷古雅
編集/デザイン

ラジオ初出演に、道頓堀の飛び込みイベントで大バズり、念願だったブログの取材依頼も来るようになり、大きく変わったと感じる秋でした。

ヤマノケ
ライター

芸術の秋、食欲の秋、読書の秋……時代や環境が変わっても飽きが来ませんな。



Tokikaze
カメラマン

紅に染まる季節。1年の間で最も短くて儚い季節だからこその魅力が秋には詰まってますね。特に美味しいキノコとか美味しいキノコとか美味しいキノコとか美味しいk(ry

STAFF

編集長｜Editor Chief
ニッソちゃん

誌面デザイン｜Design
思惟かね
燕谷古雅

校正｜Proofreading
Nag

執筆｜Writer
ｓｕｎ
わく
ヤマノケ
ニッソちゃん

撮影｜Photographer
Tokikaze
オージュ
ニッソちゃん
わく（裏表紙）

Platform Vol.8 【残暑から秋への移ろい】

発行：Platform編集部（platformvirtualreal@gmail.com）
一版（2023/11/4）

To the next JOURNEY.

2023.11.4

Our Journey Continues...

Platform

Vol.8 残暑から秋への移ろい